

朝5時半、保健師の仕事で忙しい母の朝は「二種類ゆで卵」から始まる。実習続きで家事免除の私と食べ盛りの弟、そして健診者さんとの切れ目のない面談のために外食などできるはずのない自分自身のため、3つのお弁当を45分きっかりで作り終える。そして、7時出勤までの45分間に、身支度から家事あれこれのすべてを終えて、家を出る。外で仕事をする母親なら、みんなそういう大変なルーティンをこなすはずだといわれるかもしれないが、それは違う。「二種類ゆで卵」とは、朝まだ胃腸が完全に動いていない私や弟の身体に見合うやさしいとろとろの「半熟」。そして、昼のお弁当用には衛生面と見栄えの良さをねらった完璧な「完熟」。たった一個の卵にも家族への思いやりを詰め込む心意気に頭が下がる。「いつもおなじ」ということはとかく「ありきたり」「あたりまえ」と思われがちだが、いつものとおり、こなし続けるすごさに圧倒される。計算してみれば、これまで約5000個を優に超える数の卵を、茹で続けている母。生命そのものである卵を扱う母の姿ひとつにも、私は深い愛とその愛に生きる信念のようなものを感じずにはられない。

おかあさん、「毎日『今日も頑張ろう!』と言ってくれてありがとう」

おかあさん、「毎日我が家の新聞配達員でいてくれてありがとう」

おかあさん、「毎日の天気と傘の心配をしてくれてありがとう」

おかあさん、「毎日法定速度ぎりぎりに車ぶっ飛ばして帰って来てくれてありがとう」

おかあさん、「毎日結末のない話をにこにこ聞きながら聞いてくれてありがとう」

21歳の私が、小学生の時と何ら変わらない「ありがとう」を口にできるしあわせ。このしあわせを守ってくれているのも母である。

今年、念入りに準備を重ねてきたカナダ留学をコロナのせいで断念せざるを得なくなった。出発予定日の数日前までニュースとにらめっこ。結局、何とかコロナが収束して飛び立てますよという私の願いは叶わなかった。どこにもぶつけられない怒りとともに、返金されなかった留学費用の額面を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。一日中休みなく働きながら家計を工面し捻出してもらった尊いお金。そのお金を何一つ生かすことができなかった申し訳なさに押しつぶされそうになった。「ごめんね、わたしのために」「ごめんね、せっかくだったのに」と後ろ向きな言葉を繰り返す私の話をうんうんとどこまでも聴いてくれた後で、母はなんと、笑顔でさらりと「さて、じゃあ次はいつ行く?」と言ってのけた。その母の言葉は、重りのついた私を、ぼうんと次のステップへ向かわせてくれた。おかげで今は、「じゃあ次は」の日を見据えて、この岡山の地で語学や地域文化を知る勉強に励んでいる。その姿を一番に応援して、喜んでくれているのもやはり母である。

ひとはしきりに<仕事>と<家庭>の両立とか<ライフバランス>という言葉を使いたがるが、母にとっては、仕事も家庭もすべてがごく自然に自分に繋がっていて、出会った

一人ひとりと共に生きることがそのまま自分を生きることになっているのではないか。母親であるからとか保健師であるからという使命感でも自己犠牲でもなく共生の深い喜びの中で生きているからこそ、あんな風に心の底から嬉しそうに笑えるのだろう。作り物でない本物の笑顔を持つ母は、これから社会に出ていく私にとって、そのまま新しい希望の道である。私もどんな時も誰かのためにささやかでも温かい思いやりと頑張りを積み重ねられる人になりたい。

ゆで卵を食する日本の文化は、江戸時代から途切れなく続く。大げさに言うなら、母はその歴史を小柄な体と小さなホウロウ鍋で受け次ぎ、毎朝愛のゆで卵をつくっている。このささやかな幸福を更なる未来に繋げるべく、私がここにいる。今日もまた完璧なゆで卵。心から感謝して、「いただきます」。